

講師として3カ年バンコク滞在、ついで中央情報局にアジア問題の専門家として8年間在勤、1960年以来コロラド大学の政治学助教授をつとめている。

この著者の履歴は本書がきわめて現実的・政策的であることを示すであろう。つまり、本書はアメリカとタイの関係史とはいふものの、19世紀はじめから第2次世界大戦にいたる歴史にはたった1章「初期のアメリカ・タイ関係」がさかれているだけである。

本書は主として、アメリカとタイとの関係がきわめて密接となった第2次世界戦争終結後からサリット政権下にいたるまでの20年たらずの期間を対象とする。そして、この期間において、アメリカがタイにいかなる政策をうちだし、援助をおこなったか、それがタイにいかなる影響をあたえ、またタイがいかにこれに対応したかという問題をとりあつかう。

この間の経過を、豊富な文献、タイ・アメリカの双方の関係者とのインタビュー、さらに著者自身のバンコクならびにワシントンのICA在勤の経験にもとづいて、詳細に述べている。まことに、戦後の米・タイ関係史として出色のものだと思う。

しかし、その結論は、きわめて常識的だ。いわく、「アメリカはタイの国家保障をつよめた。アメリカの技術援助はタイの経済発展の刺激となった。アメリカの教育計画はタイの知識水準を高めることができた。しかし、軍事援助に重点をおいた結果、軍部がこの国の支配的な政治グループとなった。アメリカはかならずしも1951年以来の軍部独裁の条件を創出したのではない。これには、その他のタイの歴史的條件が作用している。しかし、アメリカのタイをして東南アジアの反共基地たらしめようとする政策のため、軍部は政治的・経済的問題により関与する結果となった。アメリカの軍事援助と狭量な戦闘的反共ミューニズムとが結びついて、（民主主義社会になければならない）政府反対活動を阻止しているのだ」と（P.214）。

わたくしは、こういった見解の書物が軍部独裁のバンコクで公然と販売されているのをおもしろいと思う。また、わたくしは、日本・タイの戦後の関係史、とくに日本がタイにいかなる影響を与えたかを主題とする研究がなされてほしいと、本書を読みながらつくづく痛感したしだいである。（本岡 武）

Eunice S. Matthew: *The Land and*

People of Thailand, J. B. Lippincott Company, Philadelphia and New York, 1964. 160 p.

世界的な観光ブームのため、アメリカやイギリスで、いくつかの外国事情紹介の国別シリーズが出版されている。ここに紹介する Matthew 女史の「タイの土地と人間」は、もう42冊を数えている Portraits of the Nations Series の1冊である。

もともと、わたくしは外国事情の案内書を読むのが好きだ。しかし、こうした新刊を紹介するのは、それ以上に、なんらかのテーマで外国を研究しようとする場合、その国の一般的知識をもっておくことが必要であるからである。（たとえば、その専攻とするところが自然科学であっても、「タイは回教国ですね」といった調子でタイへこれられては、その研究がうまくゆくとは思われない。なぜなら、自然科学研究の場合でも、タイ人となんらかの形で協力が必要とされるからである。）

著者 Matthew 女史はコーネル大学で ph. D. をとり、アメリカの対外援助（Point IV program）が発足したときこれに参加、タイ国の教育省に5カ年間協力した。彼女は、この貢献のため、アメリカ国務省国際援助局より Citation of Meritorious Service を授与された。現在ニューヨークのブルックリン・カレッジ教育学部教授であり、国際比較教育を専攻している。

本書は彼女のタイ在勤の経験にもとづいたものであり、とりわけ彼女は農村における教育に努力しただけに、農村事情について、外国人としては珍しくくわしい。

本書の内容は、自由の国一ムアン・タイからはじまり、バンコクとタイの農村を説明する。しかし、本書のなかばがさかれ、またそれがこの本の特徴であるのは、これにつづくタイの歴史についてである。国王の物語、アユタヤにおける国王と外国人冒険者、アユタヤの陥落、シャムの再出発、キングモンクーとアンナ、チュラローンコーンと近代、シャムからタイランドへと、この歴史に7章があてられている。（バンコク王朝の200年たらずの歴史を一応知っておくことは、タイの近代化を理解するうえに、とくに重要である。）このあと、タイ人の性格、宗教、芸術などを述

べる。そして最後に、きわめて楽観的なタイの将来を簡単に言及する。

本書は、彼女の10年前の経験であるだけに、もうかなり時代おくれな叙述が、ところどころ見られる。たとえば、「バンコクでは小型ヨーロッパ製のタクシーがはんらんする」とあるが、今日、タクシーのほとんどは日本製だ。これは著者の責任というよりも、それほどタイは急激に変化発展しているということである。この変化発展について、著者があまり強調していないのは、タイの概説書として大きな欠点だと思われる。

しかし、とくに歴史に重点をおいたタイの入門書として本書は特色をもっている。加えて文章がきれいだし、写真も印刷もみごとで、読んでいてなかなかたのしい。タイへはじめてこられる研究者に、その専門のいかに問わず、目をとおしていただきたい本である。

(本岡 武)

Khana Ratthamontri: *Pramuan Sunthraphot khong Chomphon Sarit Thanarat 2 Vols.* Rongphim Samnak Nayokratthamontri, Bangkok, B. E. 2507 (1964). 1318 p.

1963年12月8日、プラモンクットクラオ陸軍病院において不帰の客となったタイ国前首相サリット・タナラット元帥の遺体は、翌64年3月17日、バンコクのテープシリ寺院附属斎場において荼毘にふされた。本書はその火葬に際し国王より初火を賜った記念に参会者に配布された「領布本」の一部をなす「サリット元帥演説集」である。編集は内閣の手になり、第1巻には仏歴2502～2504年(1959～1961)、第2巻には仏歴2405～2406年(1962～1963)がそれぞれあてられている。表題には「演説集(Pramuan Sunthraphot)」とあるが、収録された内容は下表のとおり多岐にわたるもので、さながら「サリット首相公式発言集」の観を呈している。

(1) 挨拶 (Kham Prasai)	104篇
(2) 式辞 (Kham Klao)	93
(3) 議会演説, 声明文など (Kham Thalaeng)	17
(4) 演説 (Sunthraphot)	5
(5) メッセージ (San)	70
(6) 訓話 (Owat)	47

(7) 上奏文 (Kham Krapthawaibang-khomthun)	12
(8) 祝詞 (Kham Khwan)	80
(9) その他	10
合 計	438

各篇の配列は内容とは無関係に年代順に行なわれているが、各巻冒頭には内容と日付を明示した目次がふされており検索に便利である。全篇中「挨拶」に分類されるものが量質ともに重要であるが、これには新年の挨拶、クーデタ記念日挨拶という国民を対象とした施政方針演説のようなものから、視察に赴いた東北タイの一寒村で、村民をまえに行なった挨拶まで含まれる。議会演説の大半は予算演説であるが、声明文はサリット政権が直面したいくつかの重要事件に対する政府の公式見解であって高度に政治的内容をもつ。「生活費値上り」、「仏教教団誹謗ビラ事件」、「ラオス・クーデタ」、「東北タイ分離運動首謀者処刑」、「ラスク・タナット声明」などがその内容をなす。

ピブン、プリディら人民党出身の理想主義的政治家たちが目指してきた民主主義への歩みを、西欧文明への盲目的追従として退け、デモクラシーへのリップサービスを一切拒否し、時代錯誤との非難をも甘受してひたすら独裁体制の確立につとめ、強権を背景に多数の野心的政策を推進してきたサリット政権の評価はかれの死後3年を経た今日、なおも定まってははいない。しかしその功罪はともあれ、30年の歴史の流れを真向から否定し、個人専制の色彩の極めて濃厚な特異の政治体制を作り上げたという点において、サリット政権の5年間はタイ国憲政史上画期的意義をもつものと思われる。この意味においてサリット政権研究の根本資料ともいえるべきかれの公式発言集が権威ある機関によって編纂上梓されたことはまことに喜ばしい。本書におさめられた演説はいずれも腹心の ghost writers が起案し、サリットがこれに朱を加えたものと想像されるが、注意深い読者は、独特な論理の展開と頻出する愛用語の中に、強烈なかれの人格の流露を得るに違いない。同時に配布された姉妹篇 *prawat lae phonngan khong Chomphon Sarit Thanarat* (サリット元帥の略歴とその業績) とともに一読をおすすめしたい。

(石井米雄)